様式第５-１号（第７条関係）

論　文　内　容　の　要　旨

氏　　名	福本貴彦
RELATIONSHIP BETWEEN LOCOMOTOR ORGAN HEALTH STATUS AND PHYSICAL FITNESS TEST IN 5TH GRADE ELEMENTARY SCHOOL STUDENTS （ 和　訳 ） 小学 5 年生における運動器の健康状態と体力測定結果の関係	

論文内容の要旨

背景：本論文は、奈良県下の小学 5 年生に対し、文部科学省が定める体力テストと運動器検診を実施し、それぞれの結果の関係を調査したものです。
体力テストは平成 11 年より『新体力テスト』となり、評価項目などの再考がなされて以降、体力レベルは低下の一途をたどっているとされています。運動器検診は 2016 年より導入され、小学生の約 1 割に運動器に何らかの障害が発生していると報告されています。運動は当然、運動器官でするものですが、この体力テストと運動器検診結果の関係に関する調査は行われていませんでした。そこで、今回はそれぞれの関係を調査することで運動器障害の発生と体力レベルの特徴を探り、運動器障害の発生状況を調査することを目的としました。
方法：対象は奈良県下の小学 5 年生 568 名（女児 259 名、男児 309 名）でした。文科省が定める体力テスト（8 項目：①手指握力・②上体起こし・③長座体前屈・④反復横跳び・⑤20m シャトルラン・⑥50m 走・⑦立ち幅跳び・⑧ボール投げ）を実施しました。また、運動器検診は運動機能の健康状態調査アンケート（7 項目）を保護者に実施してもらい、担任と養護教諭が確認したのちに、学校医が整形外科への二次受診が必要と判断した児童の人数を数えました。
結果：体力テストの結果は正規分布をなしており、平均値・歪度・尖度によると、今回の我々の調査結果と全国的な分布との間に違いは見られませんでした。 運動器検診で二次検査を必要とした児童は 39 人（6.9%）でした。 体力テスト結果を横軸とし、二次検診を必要とした児童のヒストグラムを作成すると、正規分布を示さず、体力テスト結果の高い部分と低い部分にピークが存在する二極化を示していました。
結論：体力テストの結果が低く、運動器障害が発生している児童は、肥満の影響を受けている可能性があります。体力テストの結果が高く、運動器障害が発生している児童は、筋骨格系の使いすぎであるオーバーユースが発生している可能性があります。
したがって、今後は双方のグループに対する適切な介入を検討する必要があります。